

第3章 研究開発の内容

3-1 運営指導委員会

■第1回運営指導委員会

<会議の日時等>

開催日時 令和7年7月16日(水) 10:00~11:30 (守山北高等学校 MORIKITABASE)

出席者 【運営指導委員】

大野裕己委員 柏木智子委員 川瀬政典委員 根木山恒平委員

【滋賀県立守山北高等学校】

杉原真也校長 柳垣弘樹教頭 林敬治事務長 大道和美教諭 高田法悟教諭

山崎仁嗣教諭 林拓矢教諭

内 容 (1) 「普通科改革支援事業」の取組状況について

(2) 事業に関する指導助言等

事業の成果と今後に向けた課題・方向性

○資料説明(木部参事)

今年度の計画と4月~6月の活動報告、みらい共創科1期生について

○資料説明(高田教諭)

地域協働研究同好会について

○資料説明(林教諭)

コンソーシアムについて

○資料説明(杉原校長)

<主な意見>

- ・昨年度の研究成果発表会では、生徒の皆さんが地域の方々と直接出会う機会を持たれている点が素晴らしいと感じた。また、本日の報告にもあったように、フィールドワーク先で自主的に清掃活動に参加している生徒がおられることや、ゆいの里のサードプレイス作り、地域協働研究同好会の活動もすごくよいことだと思っている。
- ・地域に住んでいる個人としての視点だが、生徒が1年目、2年目、3年目と地域の方にどれだけ出会うかということをもKPI(重要業績評価指標)にしてもよいのではと思っている。多様な地域の方に出会うことは、生徒の精神的な変化と相関するのではないかと思われ、そういったデータを取ってもよいのではないか。
- ・昨年度末のこの場でも少しお願いしたことだが、地域の方々とコミュニケーションをとれる体制を学校全体でとっていただけたらと思う。現在、担当の先生が奮闘してらっしゃるが、異動があるお仕事だと思うので、1人に全てが集中するということではなく、多くの先生方がたくさんの方々と有機的につながっていることが重要かと思う。
- ・ゴミ拾いの活動に生徒が自主的に行ったことを、学校が喜ばしく受け止めておられることは、とてもよい。個人的にはインターンシップに行った生徒が、その後そこでアルバイトをするといったことがあってもよいのではないか。可能なら教育委員会も学校もある程度手綱を緩め、生徒が学校の活動を通して地域の方々に会い、その後ボランティア活動に参加するとか、アルバイトをするといったことがあってもよいのではないか。学校はできれば生徒を観察して本日のように報告いただけるとよいと思う。加えて、万が一サポートが必要なときはここに連絡するというような体制だけ作っていただけたら、こういったことは他の学校にはできないことなので、守山北高校の価値になってくると思う。これはすぐには広がっていかないの、少しずつ続けていただけたら、今後とても楽しみなものになっていく。私もコミュニティスクールに参加させていただいているので、また関わらせていただけたらと思う。

- ・新学科が開設されて、非常に良い取り組みで評価できることも多い。このクラスが持続的に発展していくためには、1期生37人の中から、小学生、中学生がロールモデルとして捉えられるような生徒が出るとよい。
 - ・組織論でも集団を引っ張っていくのは1~2割ぐらい。引っ張っていく方と真ん中ぐらいの生徒さんは、この後2年生、3年生になっても頑張っていられると思うが、入学時にフィールドワーク等に強い魅力を感じておらず、学習も苦手な生徒の中には、やはり疲れてくることもあるかと思う。そういった生徒に対して、それほどプレッシャーにならないような、温かく見守っていただけるようなクラス体制ができるとよい。思い切り勉強に取り組むのが苦手だが、フィールドワークをしながら、高校卒業後は地元の企業に就職したいという生徒も安心して入れるような、セーフティーネット的な要素もぜひお考えいただければと思う。
 - ・学校のご説明を聞かせていただき、最初に感想として申し上げたいのは、1期生が入り、学校として、守山北高校の文脈で新しい仕組みを理解して、練り上がってきている点が嬉しく思った。そして2人の委員からのご発言をお伺いしたが、ある種の柔軟性を持ちながら、生徒さんが創発するのを待つというか、インキュベートのような感じで見ること大事ではないかというところは、こちらでも学ばせていただいた。
-
- ・これまで先行的に学んだ生徒がおられるので、その方が卒業されて学んだことがどう生きているか、卒業生の方々へ可能な範囲でも調べられるといいかと思う。学校の意図通り積み上がってきた点の確認や面白い学びの体験・経験というものが生徒にあるのか、これをもって学校の中核的なコアだと言えるものを説明できるようになるとよいのではないか。
 - ・広報について、とりわけWebサイトで2点ほど広報の努力をされるといいかと思う。1つはやはり生徒が見て、生徒に働きかけるという広報。そして、地域の方々や場合によっては中学校の方々、外から楽しみにご覧いただいて、それで味方を増やすような広報である。兵庫県の山間部の学校では、校長先生が学校のブログを継続して更新された例があり、そこでは影で働いている方を割とよく紹介されており、このようにして子どもの教育ができていくということが分かる内容だった。楽しみで読まれる方が増えてアクセスが増えてきたようだ。特に地域と繋がるという守山北高校の場合にはこのようなターゲットを考えてもいいのかなと思う。この2つのターゲットでコンテンツを考えるということあっていい。もう1点は、段階をもって考えるということ。今の段階では、生徒の学びのプロセスとか、そこで先生方が頑張っている学びの支援といったものをできるだけ見せるようにすることで、中学校側は安心して預けられる。やはり最初は意識された方がいいと思う。それが進んできたら次の段階、学校のアドミッションポリシーやみらい共創科に行くためにこういった学びをしてきて入って欲しいといったことを伝えながら、レジリエンスの高い子どもさんを送ってもらえるように、中学校の指導に繋がっていくようなところか。そこで一定のレジリエンスを持った生徒に入っていれば、先ほどの課題といったところにアプローチできるのではないか。広報の戦略性という点で、二つのターゲット、そして段階制、そういったものを考えてみていいかなと思う。
 - ・山口県の高校の例だが、SSHの指定校で理数科と普通科の生徒と一緒に探究学習に取り組むなど横展開されたり、保護者や中学生に公開されたりしていた。ここでは、雰囲気良く学校の様子も分かっていた。例えばそのような、実際に見て分かっていたら、期待値を高めてもらうという意味で、限定された範囲での公開もありではないかと思った。
 - ・総合的な探究の時間、もりきた学を、「学ぶことっておもしろい」と思える動機付けとして位置付けることが大切だと思う。その学びを生かして大学入学につなげるのも、高校運営の戦略として、生徒個人の進路形成としてはもちろん重要だが、そればかりになるとせつかくの探究が正解主義的な探究になる。例えば、より見栄えの良い成果を出すことがよい探究であると生徒が考えるようになると、生徒はより深く広く探ることよりも、いかに評価の高い探究をするかに目を向

け、問題を解決する正解を教えてほしいというような状況に陥る。そうすると失敗できなくなり、先生のアたりが良ければ、社会のなかで賞をとれるような探究成果が生み出せるという、先生のアたりはずれまで生み出す。そうではなく、地味に見えても、どれだけ一歩ずつ考えようとしているのか、深く探ろうとしているのかを評価し、その評価過程では、そこにどのような意味があるのかを生徒と教師で共に考えていくことが重要であると思われる。

- ・生徒の感想を見ると、正解を見つけるのではなく、何かを発見することがフィールドワーク、五感でと書いているので、とてもよい学習が行われていると思う。このまま継続していただきたい。また、このような学びは、就職される方にこそ大切である。そこでの体験や学びが就職後に困ったときや、発展しようとするときに、ふと「そういえばこんなことやったな」、「聞いたな」という考えを作る際の素地になり、学び直しのきっかけにもなる。
- ・市の行政には、コーディネーターの方を雇用し、複数の高校をまたいででも、探究の基盤整備をすることが求められていると思う。学力形成でのみ広報を打ち出すのではなく、未来の地域・市自体の安心・安全のある共生社会をつくる主体を育てる教育として、広域に視野を設定し、信頼ある高校だと打ち出すのも一つの戦略としてありうる。
- ・地域協働研究同好会は、部活動としてもよいと思われる。また、探究では、それぞれのテーマを持つことも大事だが、教員の専門性を生かした探究を進め、先生をモデルにテーマの深め方、広げ方、つなげ方を学ぶことが生徒にとってとてもおもしろかったりする。

■第2回運営指導委員会

<会議の日時等>

開催日時 令和7年12月9日(火) 10:00~11:40

(守山北高等学校 校長室、MORIKITABASE、1-4 教室)

出席者 【運営指導委員】

大野裕己委員 柏木智子委員 川瀬政典委員 根木山恒平委員 森中高史委員

【滋賀県立守山北高等学校】

杉原真也校長 柳垣弘樹教頭 林敬治事務長 大道和美教諭 高田法悟教諭

山崎仁嗣教諭 林拓矢教諭

上田隼也コーディネーター 田口真太郎コーディネーター

内容 (1) みらい共創 授業参観
(2) 「普通科改革支援事業」の取組状況について
(3) 事業に関する指導助言等

2学期の取り組みの振り返り等

○みらい共創 授業参観

みらい共創科2学期の活動報告、AiGROWの結果、2年次の授業計画について

○資料説明(高田教諭)

<主な意見>

- ・授業の様子を見させていただき、子どもたちはよい雰囲気で行っているなど感じた。今年は守山北高生に市内のイベントによく参加いただいている。イベントを開催する側も喜んでいるし、生徒にもよい経験ができていいるなら、ありがたいことである。
- ・探究テーマは、例えば環境、福祉といったくりだとグループで取り組みやすいのかなと思ったが、個別の職業になると細分化されてくるなどと思った。市も協力できるので声をかけていただけたらと思う。

- ・2年生が1年生にアドバイスするといったことも、よい経験になると思われる。
- ・本日、初めて生徒さんが話されている場を見て、フィールドワークをたくさん行い、様々な校外の方と接触して、仲間内で話して、という経験は非常に有意義なものだと感じた。今は、彼らが対外的に経験や得たものを伝えるのは難しいかもしれないが、社会に出たり年を重ねたりして、その時の経験が活きているなど振り返る時期が来るのではないかと思う。少し心配なのは、生徒の自己肯定感が上がっているとお聞きしたが、グループワークの中で、発言しなくても、座っているだけでも十分な活動と感じている生徒もいると思う。他の生徒からは、なぜあの子はしないのと軋轢が生じるかもしれないが、その場にいるだけで充分だという生徒はなるべく大人が守って、学校に行きにくくならないよう取り組んでいただけたらと思う。
- ・活動資金については、2、3年生になったら、計画とそれに対するコストがどのようにあるか把握し、予算を組んで自分たちの管理下でお金が減っていくことを経験するなど、細かい管理もできればより良いものになるのではないかと。様々なルールがあるので一概にできるものではないが、例えば模擬店など売り上げが出るものを通して、経験を積ませてあげられたらと思う。
- ・生徒たちは、我々にうまく応答してくれて、スキルアップしているなど感じた。今、地域社会が劣化しているので、本来学校がしなくてよかったことを学校がしてあげないといけないう状況なのだなど改めて感じた。地域に出て、様々な大人に出会い、経験を積んで自己肯定感を高めていくという経験を学校が用意しないと、地域社会は提供できないのだろうなど実感した。地域社会ができないことを学校が取り組み始めているので、もっと地域に求めてもよいのではないかと思った。守山北高校での学習を通して、子どもたちが地域に愛着をもち、地域に残っていくということが少しずつ始まっているなど感じた。口コミで広がるには時間がかかるため、志望者が増えるのも時間がかかると思うが、これが続いていくと定員が埋まっていくのではと感じた。
- ・人間関係の課題は学びのチャンスではないかと思っている。組織でも人間関係をどう回していくかは必ず問題になってくる。周りの生徒たちも困っていると思うので、そういう生徒たちにこの状況を何とかするためにどうすればよいか、といったことが学びになるかもしれないし、学びの動機付けとしてはよいものになるのではないかと思った。
- ・お金の管理について、できるかは分からないが、例えば地域の団体等とパートナーシップを結んで、学校から団体に委託費を支払い、団体の方に生徒の調整も含めてお金の管理をお願いするといった仕組み作りをされてもいいのでは。また、1年生のうちに様々な団体と繋がれるのがよい。いずれは守山北高校と連携したい団体募集、というプログラムをつくるのもよいかと思った。
- ・先生方が生徒の学びのプロセスに親身に向き合い、啐啄同時に近いタイミングで動かれているところ、尊く参観させていただいた。今年度の1学期の探究基礎の学びが2学期に活きているのか、また、このつながりをより良くすることは考えられるか。そういった縦の繋がりをどういうふうにみられているかお伺いしたい。やがては、ここで自分のキャリアが見えてきて、教科の学習の意欲につながってもよいのかなと思う。
- ・生徒はいろいろな経験の総体の中で自分たちの学びをストーリーのように積み上げていく部分があると思う。今は、学びを繋いでいくとても大事な時期に入っている。外の方々は長期に関わって生徒の成長を見守っていただいていると思うが、内の先生方は、毎回の授業時間で途切れていく側面もあるかと思う。しかし1年の中でこういった働き掛けで、生徒はどういった学びの積み上げがあったか、年間通じてどういう繋がりがあったか、そのあたりを可能な範囲で整理いただけたらと思う。先ほどの説明の中で、繋がりをより良くしていくために1学期の活動を切り替えたがあったが、今後もそういったことが必要になると思うので、この辺りの振り返りを学校として行っていただきたいと思う。
- ・短い期間で生徒がここまで生き生きと成長してきているのはすばらしいことと思う。

- ・今回は地域課題解決型の演習授業ということで設定されていると思うが、生徒の感想を少し読んだり話を聞いたりすると、地域課題が何であって、それを解決するための小さい課題や目標があって、自分たちはここを取り組んでいるという、一連の体系図みたいなものが十分につかめてないのではないかという気がした。例えば、なぜ弓矢の企画を選んだのかと聞いたら、小中学生があまり触れてないからと回答いただいた。生徒が答える課題解決の次元が自分の活動の範囲の中なので、それを通してどういうふうに地域課題に繋げていくのかという、課題を多層的、多次元的な観点で見ることができると、生徒の成長も促されるかもしれないと思った。
- ・2点目は、みらい共創の2年生の探究テーマで、アドバンスコースが「なりたい自分」、キャリアコースが「インターンシップ」というのは非常に分かりやすいが、「なりたい自分」になるということを考えるのは、アドバンスだけでなくキャリアにも必要である。また、アドバンスの中には、個人と向き合っていくといったところが散見されるが、そちらにもキャリアコースで描いているような社会の課題と向き合いながら、どう貢献していくのかというところと繋げて、自分を考えられるような仕組みを持ってほしいかと思う。したがってみらい共創Ⅱと書いてある資料のアドバンスコースとキャリアコースを、もう少しお互いに混ぜてもいいかと感じた。
- ・フィールドワークではリサーチして自分たちで計画して実行、フィードバックをいただいた上で、もう1度実行があるという点は素晴らしいと思う。
- ・総合的には、新学科創設と生徒の迎え入れがあり、学校側が、生徒の実態に合わせてより望ましく関係科目の教育内容を創る努力をされている点を尊く思った。
- ・実態を踏まえて適切に固めた探究の内容を、守山市はじめ通学圏市町教委・学校とより共有していくことを考えていただけたら。兵庫県下の市教委に関わっている中で、教育長等から小・中から地元高校の探究とつなげる発想・手立ても必要、という意をおうかがいすることも多いため、そのあたりの工夫が各地に必要な時期かもしれない。
- ・将来的には、方向性を一にする取組校と生徒間／教員間の交流やネットワークを形成することも視野に置いていただけたらと思う。
- ・学校側から発言あった活動資金に関して、山口県のある高校では、「学校長の前で研究計画をプレゼンテーションし、その評価に応じて研究資金を分配する」校内科研費という着想もある。

■第3回運営指導委員会

<会議の日時等>

開催日時 令和8年3月23日（月）13：00～14：40

（守山北高等学校 MORIKITA BASE）

出席者 【運営指導委員】

大野 裕己 兵庫教育大学学校教育学部教授

川瀬 政典 株式会社日本政策金融公庫大津支店支店長

根木山 恒平 NPO 法人碧いびわ湖常務理事

森中 高史 守山市市長

【滋賀県立守山北高等学校】

杉原真也校長 柳垣弘樹教頭 林敬治事務長 高田法悟教諭 山崎仁嗣教諭

上田隼也コーディネーター 田口真太郎コーディネーター

内 容 (1) みらい共創科生徒による成果発表・質疑応答

(2) 3年間の取組成果と課題

(3) 所感（コーディネーター、運営指導委員）

- 成果発表（みらい共創科生徒）・質疑応答
- 3年間の取組成果と課題（高田教諭）
- 所感（コーディネーター、運営指導委員）

○発言概要

成果発表に対するコメント

<テーマ：クリスマス球技大会>

- ・実際に取り組んでみると計画通りにいかないこともあったかと思う。皆で相談しながら柔軟に変えていくことも大事なことであり、そのような体験ができたことは良かったと思う。
- ・本日は市長はじめ、多くの大人がいる中での発表はよい経験になったと思う。将来の様々な局面で役立つと思うので、本日のことをぜひ記憶いただきたい。仮説、実行、検証のプロセスは、いろんな場面で使えるため、次に取り組まれるイベントでも活かしていただけたらと思う。

<テーマ：SHINING>

- ・タイトルに工夫があってとても良いと思った。アンケート結果を示すときは母集団の数値を示すと結果が伝わりやすいので、今後の参考としていただきたい。
- ・本日の発表を聞いて、守山市のことを少し知ることができた。いろいろな場面でお話しいただくことによって、どこかで誰かに伝わっているということを知ってほしい。外部の方にアンケートを取ることも非常に力があるため、経験値が一つ上がったのではないかな。
- ・守山に住んでいるので毎年見に行っている。いつも12月に行っており、1月にはすでにイベントが終わっているという感じがしている。開催時期についても検討できるといいのでは。

<テーマ：弓矢うまくなれるかな？大作戦>

- ・参加者目線から運営目線になったことで、想像力を働かすことができたのは非常に良い経験になったと思う。今回のイベントに限らず、常に、自分とは違う立場の人の目線を意識して物事を考えると物事の見え方が変わってくるので、意識すると良いと思う。
- ・今日の機会を自分の中で大切な経験として記憶いただきたい。運営側の立場でいつもと異なる面を感じ取れたのは貴重な経験をされたと思う。
- ・自分たちの取組を見渡せる視点ができていることが素晴らしいと思った。

<テーマ：福祉施設のサードプレイス化>（地域協働研究同好会）

- ・地域協働研究同好会の皆さんには、市の様々なイベント等に参加いただき、ありがたい。この取組は素晴らしく、自信を持っていただけたらと思う。今後、活動を継続していくには、まずは自分たちが楽しいと感じることが大切で、周囲を巻き込んでいただけたらもっと良くなっていくと思う。
- ・地域課題にここまで入り込んで取り組まれているのはすばらしい。地域協働研究同好会の皆さんが、学校と福祉施設の間に入ったことで、大きなことができたのではないかな。熱量を維持していくことは簡単ではないが、引き続き地域のために頑張っていただきたい。
- ・地域の話題にもなって、守山北高校が変わっていくという良いアピールになっているのではないかなと思う。みんなが少し寄って行こうかな、居心地良いなと思える場になるよう、今後はいろんなことを提案して、できること、できないことあると思うが、実践いただけるとよいと思う。
- ・実際に取り組んでみて、こういった関わりができるということを学ばれたと思う。今後は「自ら成す」だけでなく、「人に成してもらおう」といった、人を巻き込む力も身に付けることを意識してもらおうとよい。総量高めるという考え方ももっていただけるとよいかなと思う。

- ・この種の取組、はじめての取組がうまくできたのに、続く取組ではそうはいかないこともある。このとき、「レジリエンス」と言ったりするが、課題から学んで3回目はもっとよくやってみようという姿勢が大切になるだろう。よい取り組みをされているので、自分たちが行っていることの意味付けをしながら、取り組んでいただけるとよいと思う。

所感等（コーディネーター）

- ・3年間で先生方とのつながりがどんどん広がり、いろんな授業に波及効果があったと思っている。個人的に最も嬉しかったのは他の都道府県の先生方が視察に来られたこと。守山北高校が他の学校の先生方に影響を与えるようになったというところはすごく良かったと思っている。課題としては、これをいかに持続可能なものにしていくかというところ。来年度は2年生のインターンシップなど重要なものが控えている中で、また来年度もお力添えできたらと思っている。コーディネーターも学校と一緒に財団等に応募して持続可能な予算を捻出していきたいと思っている。委員の皆様にはぜひご指導いただきたいと思っている。
- ・先生方はじめ周囲の大人は生徒の成長を直接見ているため、期待も上がっているが、生徒は実際どうなのかというところを振り返りながらヒアリングした。男子生徒は、例えばボランティア活動など忙しくて大変だが、自己成長の機会がモチベーションになっているようだ。女子生徒は、例えばマルシェで何か売れたときに声かけてもらうといったコミュニケーションで、対人関係でしか得られないようなところに自己貢献を感じて、魅力ややりがいを感じているようだ。生徒が成長を得られる評価指標はたくさんあるが、個別に異なる。生徒たちがどこに成長感やモチベーションを感じているかというのは、今後継続して見ていかないといけないと思う。同好会のムービーを見ていただいたが、この3年間の集大成の一つではないかと思う。このような学校は他の自治体にもあった方が社会も良くなるし、5年後10年後にここで育った生徒が守山の担い手になれば素晴らしい。そのためには全員で外部に向けてプレゼンテーションしていけるといいのではないかと思う。引き続きお願いしたい。

所感、助言等（運営指導委員）

- ・これまでの成果ということで、体験会の参加人数は多かったが、入学というところの成果につながっていないのは残念。授業料無償化拡大の影響が県内の公立高校全体に出ているのか。
→高校授業料無償化拡大は全県的に大きな影響が出たという受け止めをしている。
- ・自己肯定感がみらい共創科で明らかに上がっているところは目に見える成果であり、しっかりPRしていくべきである。先生の負担は相当なものとお見受けする。来年は2学年となり、この学びを安定的に継続していく必要があるため、体制をどう考えていくかが課題で、市としてもできることは考えたいと思っている。
- ・10年後に卒業生にアンケートを実施するというカリキュラム評価の枠組みを、今の時点で作っておくことも必要ではないか。その中で学校の学びの何が役に立ったのか、これがとても良かったといったことを学びの経路として聞くことで、学校のカリキュラムの確立に活かし、そのように校内で固めた考え方を外側に向けてアピールすることができる。
- ・1年間関わらせていただき、カリキュラムが素晴らしいものだと感じた。卒業生が出たときには卒業後の進路実績を見せることも生徒を集めることにつながるのだろうと思う。
- ・今後もこれまでの頑張りを継続していけると、ご紹介いただいた事例のように結果が出るだろうと思う。2年生からインターンシップも始まるが、地域の力を取り込んでいくにはそこも大事な部分かと思う。地域の企業でも守山北高校の卒業生が新規採用で入って喜んでいただいている。このような実績を積んでいただけるとよい。

その他

- ・37人でスタートし、課題もあるが、この1年間で生徒の人間的な成長をととても感じるし、それは学年はじめ周囲の先生方にも良い影響があったと思う。
- ・みらい共創科がスタートし、地域協働研究同好会もできて活発に活動されているが、その意義が校内でしっかり伝わっているかという点、少し弱く感じるし、温度差もあるのではないかと感じる。
- ・生徒が変わることで先生方も変わり、学校が地域の方にも評価されるという好循環は県としても目指していきたい部分。これまでの委員の皆様のご助言もあり、生徒の成長をみることができた。今後も何らかの形で学校に関わっていただくとありがたい。守山市様のお力添えも引き続きお願いできるとありがたい。
- ・来年度も成果発表会は実施させていただくことになるかと思う。運営指導委員の皆様にはアドバイザーという形で可能な範囲でご指導、ご支援等いただけたらと思っている。

3-2 先進校視察（兵庫県立柏原高等学校、岡山県立邑久高等学校）

◇目的と概要

①兵庫県立柏原高等学校（普通科改革支援事業 R4～R6年度 指定校）

地域社会に関する学科のカリキュラム充実に向け協議を行う。特に指定終了後のいわゆる自走についての意見交換や、本校と同じく普通科と地域社会学科を併置している状況での学校経営や運営と中学生の志願状況について協議を行う。

②岡山県立邑久高等学校

学校所在地の瀬戸内市との様々な連携の取組を充実させ、学校の魅力化や生徒の育成を行っている。総合的な探究の時間を軸に地域探究活動に取組み生徒を育てる学校づくりをされており、本校の教育内容（総合的な探究の時間、みらい共創）の充実の参考としたい。

地域資源の活用や地域課題の解決にむけた課題研究の成果を、その視点を持つ生徒同士が発表を通じて意見交換（Zoomを活用）することができればと考えている。活動を通して新たな研究視点やそれぞれの地域の魅力に気づききっかけになることを期待している。さらにそういった同世代の存在が刺激になり、地域に残り頑張る生徒の育成や地域の将来につながると考えており、県外高校と連携する取組の意義はあると考え、協議を行いたい。また本校の文科省指定期間終了後の自走に向け、行政機関との連携によりいかに経費をねん出したり、工夫されているかを参考としたい。さらに定員未充足の状況から、9年かけて地域との連携を深め、地域協働と探究で生徒を育てる学校づくり、志願者が定員を超える学校へと改革を進められており、広報活動も含め、今後の本校の目指すべき姿としての羅針盤となると考え情報交換を深めたい。

◇視察の記録

①兵庫県立柏原高校

日時 2026年1月22日(木)11時30分～

(柏原高校) 稲次校長

研究推進部 尾花先生、原先生、藤本先生

概要

129周年を迎える伝統校、丹波市内の進学校

H.20 理数コースを「知の探究コース」へ改組

H.27 SGH アソシエイト校に指定(5年間)

H.31 文科省指定事業 地域との協働による高等学校教育改革推進事業[グローバル型]に指定(3年間)

R.4 文科省指定事業 普通科改革支援事業に指定(3年間)

R.7 DX ハイスクールに指定

課題

現状 40 名 5 クラス規模

年によっては定員割れもあり、福知山市への生徒流出の危機

学校の特徴

- ・早い時期から「探究」に取り組んできた実績
- ・部活動加入率 95%以上（地元の生徒多く、田舎の真面目な生徒が多い）
- ・月曜、木曜が 7 限授業
（探究に関する学校設定科目を 3 年間で 7 単位）←県からの指示で
- ・新学科設置(R6 年 4 月スタート) 地域科学探究科 1 クラス 40 名
県教委からのトップダウンで学科名決定
- 県の意向的は、商業科のような実業学科にしてほしい
- 学校内、地域は反対、学問を深める特進的なクラスを目指す

新学科ではなく、普通科の総合的な探究の時間を地域探究とした
(グループでのフィールドワーク、地域人とコラボ、地域イベントで発表)

新学科の学校設定科目

1 年次「丹 BAL I」(1 単位) 2 年次「丹 BAL II」(2 単位)

大学と連携強化(武庫川女子大のゼミ生に伴走してもらう)

単元によるが、1 クラスに 8 名の教員が入る

※普通科は 4 クラスに 6 名の教員

これは、新学科の生徒に学校を引っ張ってほしいから、教員を多く関わり支援するため
ただし、推薦入試などは普通科と平等の扱い

・教科横断型探究(1 単位)

今年度「愛を探そう」

1 時間の授業を教科が異なる 2 名の教員で担当。年間約 30 時間で、全ての先生が授業を行う

(例)平安時代の寝殿造と家族観(地歴×家庭)

年間予定とテーマを研究推進部が考え、各教科主任に渡す。そこから、教員が割り振られる

成果

生徒の探究力や、学びへの主体性+生徒以上に先生の探究力アップ

授業準備を普段の仕事では関わりの少ない先生同士でコミュニケーションとりながら行う

自分の教科外の異なる視点を見つけられる

先生たちが楽しそうに授業をやって、そのよい空気が必ず生徒に伝わる

新学科のことを「みんなでやる」空気の醸成へ

テーマはより抽象的なものにするよう心掛けている

探究の振り返り、評価

- ・毎時間終わりに forms で文章で回答させている
- ・学期ごとに、生徒の振り返り文から生成 AI で要約させて、その文章を通知表とは別に渡している。(通知表は空欄)

校内の組織体制

- ・研究推進部を新しく作成
 - ※それまでは教務課の1担当が探究をやっていた
(CNと校長のみが、決めていたため、教員の激しい反発、カリキュラムが何も決まらない)
- 部として独立することで、決定権に対する責任、ある種の正しい権力がつけられた
 - ただ、大枠は普通科なので、科の主任ではなく、あくまで探究担当
- ・普通科の総合的な探究の時間と新学科の学校設定科目のカリキュラムを担当
授業スタート時にGoogleミートで指示して、その後は授業担当者に展開してもらうシステム
- ・中学校訪問
校長がまわると、中学校側も管理職の対応
→これでは、学年進路など現場までこちらの声が届かない

探究研究“部”としてあることで、成果の引き継ぎも可能
授業が空いているときには、探究のサポートに行っている
今年度のベネッセ模試で、模試の結果、伸び率が関西1位獲得
→探究に疑問を持つ先生への説得力になった

コーディネーター

- ・3名体制
 - 1名はDXハイスクール予算
 - 2名は市の予算(このうち1名は市教委採用)
→2年間かけて市の教育委員会と折衝
市でコーディネーターを市内の小中高に、派遣するシステムづくりができれば、ベスト(県には断られていた)
 - メインのCNは週2日程度出勤
探究の伴走、カリキュラム開発・・・で多岐にわたる
今年度から1名追加
市教委採用として、放課後の公営塾のような形の補習を実施して下さる
(探究を使っただけの総合型選抜対応など)
探究カリキュラムのシステム化はある程度完了
コーディネーターにたくさんの仕事をしていただいている。
(今後も継続してずっとお願いしたい)



※学校側の人が変わってもシステムを維持するために、コーディネーターに仕事をどんどん依頼している。反対にコーディネーター側からさまざまな提案をする場合もある。

コンソーシアム

普通科改革からDXハイスクールなので、同じような形で組織化
ただ、DXハイスクール指定にあたって、より高大連携を進めるために、大学の先生にたくさん入ってもらっている
→生徒の発表会の講評、指導助言含む

広報

- ・インスタの開設、積極的な運用
 - 生徒会組織の中にSNS委員会設立
- 背景は定員割れによって、生徒が危機感、生徒からインスタ開設の要望
→SNS委員会立ち上げ、自分たちで編集する(コーディネーターもサポート)
顧問などが校長決裁を得て、生徒がアップする



②岡山県立邑久高校

日時 2026年1月23日(金)10時30分～

進路指導課主任矢野先生、小西主幹教諭、水田コーディネーター

概要

瀬戸内市内の唯一の高校

100年をこえる伝統校

10年前に学科改編

普通科4クラス→普通科3クラスと生活ビジネス科1クラスに

普通科は、2年次よりコース分けされる

(文系、理系、美術重視モデル、看護重視モデル)

生活ビジネス科は、2年次よりコース分け

(情報ビジネスコース、保育食物コース)

10年前、定員割れが続いて、生徒の問題行動も増加

中下位層の生徒が集まる、中学時代にリーダー経験も不足

2016年～地域と連携した探究学習に舵を切る

総合的な探究の時間を「セトリー」(Be SETOUHI Leader)として改革

「地域で学ぶ、地域から学ぶ」

1年目、教務課が担当

2年目、進路課に担当変更

→ 進路支援と連携した探究を推進するため

探究の特徴

- ・教科との結びつき(学問的)
- ・進路分野別(進路意識)
- ・体験と実践(主体性)
- ・地域との連携

なぜ探究か

生徒の探究心、進路意識、地域貢献、社会性、高校の魅力アップ

地域探究により地域の方が喜ぶ、生徒の自己肯定感アップ→定員募集も上昇し、安定してきた

将来にわたって地域で生きていく土台をつけさせる

生きていく土台=1人でやり遂げるよりも、だれかと協働して何かをやる

→これをセトリーの中で養う

評価、振り返り

- ・非認知能力の向上へ

(考え抜く力、チームワーク、課題解決力、主体性、関心意欲態度)

10年前にルーブリックを作成し、毎時間の自己評価にてルーブリックを活用

ただ、ルーブリックは、教員から見た力のことになっており、生徒目線ではなかった

4年前にルーブリックをシンプルに簡素化、ブラッシュアップを繰り返している

総合的な探究の時間「セトリー」(進路✕探究)

1年次「地域を知る」

普通科

地域の課題を深く知る

- ・SDGsカードの作成、小学校への出前授業

(今の状況、行動、問題)



生活ビジネス科

3年次の課題研究につながる地域理解

- ・瀬戸内市人物図鑑の作成

「よりよく生きる」をテーマに取材

- ・地域教材でかるたを製作



2年次

普通科「地域の魅力、課題発見、解決」

- ・進路別グループ別探究(瀬戸内市内が研究対象)

カテゴリーは文化、歴史、観光、経済、医療、福祉など年によって変わる

10人1チームを編成

(カテゴリーによって10人を細かくグループ分けしたりしている)

最初はテーマ設定にかなりの時間と労力がかかっていた(そのわりに良いテーマにならない)

学校側でカテゴリー分けして、ある程度のルールをしく

同時に、地域からのオファーも見ながらマッチングできれば、生徒に案内してみる

(探究は、地域の伴走者がいないと成立しない)

最後にポスター発表

生活ビジネス科

情報ビジネスコース

- ・瀬戸内魅力新聞づくり

学校活動したことを言語化し、表現、発信する力を養うため

→3年次の課題研究につなげるために2年次に実施

保育食物コース

- ・高齢者福祉施設の交流イベントの企画運営

レクリエーションの企画運営を通じて、コミュニケーションや表現力の向上を目指す

3年次

普通科

2年次までの活動をまとめ、進路実現に向けた準備

- ・レポート、活動報告書
- 進路実現に必要なことは発展演習で準備(個々の課外活動)

生活ビジネス科

「課題研究」

情報ビジネスコース

- ・観光 瀬戸内 PR 動画作成
- ・販売 商品開発

保育食物コース

- ・保育 保育実習
- ・食物 地元食材活用でメニュー開発

課題研究&セトリー実践報告会

3年普通科以外の学校発表会→3年普通科は当日の運営にまわる

※全員が発表者、運営、聞き手になることで、継続した取り組みへ外部で連携していただいた方にも参加してもらおう→発表会後に運営指導委員会

セトリー運営指導委員会(外部委員) 年間2回(7月、11月)
委員は、地域連携の実を伴う組織(自治体や企業、大学など)
実践報告会後に、開催し次年度の助言をいただく
学校内は主幹教諭、進路指導課主任、コーディネーターが中心

地域のキーパーソン

- ・瀬戸内市総務部 → 企業見学ためのバス代を全額負担
- ・地域コミュニティ協議会 → 人と人をつなぐ支援

生徒の卒業後

- ・地域系学部
- ・地域という視点+関心ある分野
- ・地元就職

持続可能にするために

- ・地域からのオファーをうまく断るのも仕事
一番は生徒の学びのためかどうか
- ・学校内の空気
邑久高校は地域と探究する学校だと覚悟して転勤してくる

予算

- ・「キャリア教育支援事業」25万円
- ・福武教育文化振興財団30万円
- ・「高校魅力向上支援事業補助金」(市)50万円

大変だけど、たくさん作文して助成してもらおう+市からの依頼は基本的にすべて受け入れる

なぜ、定員復活できたのか

- ・セトリーの活動が柱

高校の取り組みを明確に、生徒の生き生きした姿(学校楽しそう)を発信、生徒募集につながった定員割れ時代は、割れているため学びへのモチベーションのない生徒が普通科に入学する悪循環探究に対して疑問の声もあった

※生徒の発表、輝く、成長した様子を見て、少しずつ変化、+探究成果で進路実現した生徒も出始めた

→ 邑久高校は探究でいこう！が共通認識

同時に地域からの好印象、中学校からの評価改善へ

中学校はこのクラスで、高校卒業後どうなるかを知りたい→それを生徒に伝えるから

- ・広報

インスタ、facebook、ホームページ(ブログ)をほぼ毎日更新

主幹教諭が生徒の毎日の活動の様子をアップ(一部、youtube も)

4月から生徒を前面に押し出すデザインに一新予定

→ 口コミが広がる

※校内の生徒が楽しそうに活動していないと無理→生徒の楽しそうな様子を外に見える化

課題

- ・生徒のフィールドワークのための旅費が足りない(主にタクシー移動しているため)
- ・教員の探究指導のスキルアップ
→ 次年度、探究部を進路指導課から独立させる予定
- ・卒業後の進路への接続、カリキュラム改善
- ・教員の人員不足
コース分け、モデル分けすることで、授業数などかなりの負担

要望

・すぐには難しくも地域探究の成果を意見交換(Zoomを活用)したい。生徒が意見交換を通して新たな研究視点やそれぞれの地域の魅力に気づききっかけになることを期待している。さらにそういった同世代の存在が刺激になり、地域に残り頑張る生徒の育成や地域の将来につながると考えている。地域の状況等は違うと思うが、県内県外高校と連携する取組の意義はあると考えており今後も協議を継続していただきたい。

おなじ目標に向かう。
皆で積み重ねた時間は、
最高の瞬間となる。

～グラウンド、体育館、教室は、
今の自分たちの大切な場所～

高校生活の中で、仲間とともに目標に向かい、努力を重ねる経験は、一生の財産となります。

部活動を通じて、自分の限界に挑戦したり、チームで一つのことを成し遂げる喜びを味わったり、

「やりきた心」を磨くその瞬間が、これからの自分を支える力になります。

部活動一覧 (2023年度)

運動部	文化部
硬式野球	華道
サッカー	写真
卓球	書道
テニス	吹奏楽
バスケットボール	パソコン
バドミントン	美術
バレーボール	同好会
陸上競技	地域協働研究部

主な成績 (過去3年間)

運動大会出場

- バドミントン (2023)

県ベスト4以上入賞(過去3年間)

- サッカー (2024)
- 陸上競技 (2024)
- バドミントン (2023)

県ベスト8以上入賞(過去3年間)

- サッカー (2023)
- 陸上競技 (2024)
- 書道 (2024)



ひとりの個性。
いくつもの力が重なるとき、
何かが生まれる。

～クラスメイトの意外な一面、
皆の表情にはっとする～

学校行事は、日常とは違う体験をすることで、クラスメイトや仲間との新しい一面に気づききっかけになります。

「全員で力を合わせた達成感」「思いがけない発見や出会い」そんな経験が、これからの高校生活を彩ります。

年間行事一覧 (2024年度)

学園祭	7月	チーム力となって競い合おう
体育祭	7月	クラスや部活での戦いが楽しみ
文化祭	10月	クラスや部活での戦いが楽しみ
修学旅行	12月	2024年度は修学旅行1日バスツアーに卒業生も参加。学びと体験の両方。
球技大会	3月	クラスの団力が試される

その他

- 進路
- 生徒会主催
- イベントなど

生徒会活動で新卒科の誇り

「私は1年、生徒会副会長に就任して、新卒科の誇りを伝えるために、様々な活動を行いました。その中で、先輩や後輩と協力して、学校を盛り上げることに尽力しました。新卒科の誇りを伝えることができたことは、本当に嬉しかったです。」

山北中学校 山北高等学校
副会長 山北 上菜 | 入江 菜穂さん

部活動で習字の両立で成長した

「習字と部活動の両立は、最初は大変でしたが、習字の練習で集中力が鍛えられ、部活動でも活躍することができました。習字の練習で身につけた集中力が、部活動でも役に立ちました。習字と部活動の両立で成長することができました。」

山北中学校 山北高等学校
副会長 山北 上菜 | 中西 航哉さん

地図は自分で描く。向きを定め、
さあ一歩進もう!

～迷ったり失敗もできる今だから、
まずは動こう!～

高校3年間で「将来の道」を考え、自分に合った進路を見つけることが大切です。

本校では、探究活動やキャリア教育を通じて、進学・就職の実現を支援します。大学・専門学校への進学はもちろん、就職や公務員試験に向けたサポートも充実。

「自分は何が好きか?」「どんな仕事をしたいか?」模索しながら学びを深め、未来へ進む力を育みます。



キャリア教育のポイント

探究的な学びを活かした進学・就職支援

- 「自分先立会」や「みらい探検隊」での学びが大学の入試や就職活動に活かせる

進路に応じたサポート体制

- 大学進学希望者対象の特別講座(英語・数学・英語)
- 就職希望者対象の個別指導(面接・履歴書指導)

キャリア形成のための実践プログラム

- インターンシップ
- 企業・地域連携プロジェクト
- キャリア講座・進路相談会

探究活動と進路支援 (3年間の展開)

プログラム	1年(基礎・基礎から目標を定めます)	2年(進路意識を高め、進路の選択肢を広げます)	3年(進路実現に向けて進路決定)
もりきた学	テーマ:「人に会う」 ～基礎的なコミュニケーションスキルの獲得～ ・人を惹きつけるコミュニケーション講座 ・文芸講座 ・地域探検(住人対面) ・進路相談会(もりきたフォーラム)	テーマ:「誰に会う」 ～探究学習の発展と進路意識の高揚～ ・進路相談会(進路ガイダンス) ・進路相談会(進路ガイダンス) ・進路相談会(進路ガイダンス)	テーマ:「已に会う」 ～自己研究プロジェクトによる進路の明確化～ ・自己研究「志望校調査」「自己研究」 ・自己研究「進路実現プロジェクト」
みらい共創 探究活動 プロジェクト型学習	「共創」の基礎理解と探究学習 ～多岐にわたる探究活動を通じて、進路意識の高揚～ ・探究活動「プロジェクト型学習」 ・探究活動「プロジェクト型学習」 ・探究活動「プロジェクト型学習」	「共創」の実践・地域連携プロジェクト ～地域と連携した探究活動を通じて、進路意識の高揚～ ・探究活動「プロジェクト型学習」 ・探究活動「プロジェクト型学習」 ・探究活動「プロジェクト型学習」	「共創」の発展・進路・社会貢献プロジェクト ～探究活動の発展と進路意識の高揚～ ・探究活動「プロジェクト型学習」 ・探究活動「プロジェクト型学習」 ・探究活動「プロジェクト型学習」
キャリアデザイン プログラム 進路実現	キャリア意識の形成 ～基礎的なコミュニケーションスキルの獲得～ ・文芸講座(ガイダンス) ・進路ガイダンス(進路意識)	進路意識の醸成・進路意識の高揚 ～探究活動の発展と進路意識の高揚～ ・進路ガイダンス(進路意識) ・進路ガイダンス(進路意識) ・進路ガイダンス(進路意識)	進路実現(実践・進路意識の高揚) ～探究活動の発展と進路意識の高揚～ ・進路ガイダンス(進路意識) ・進路ガイダンス(進路意識) ・進路ガイダンス(進路意識)

進路実績 (過去3年間)

卒業生の進路割合	就職 32.6%	大学進学 32.1%
進学・就職ともにも多様な進路選択があるのが特徴!	専門学校 35.3%	

卒業生からのメッセージ

#01 「おもいっきり」過ごした
高校時代が、人生の糧に

井入 昌樹さん | 井入 吉信さん

守山北高校での3年間は、陸上競技のトレーニングで身体能力が伸び、仲間と競い合い「おもいっきり」活動できた。この経験が、今の自分をつくったと言っても過言ではありません。卒業後はIT企業でプログラマーとして働き、30代後半で人生を見つめ直し、両親が営む農業の世界へ。高卒の頃は農業を「カッコ悪い」と思っていたのですが、今では一流ホテルやレストランに認められ、誇りを持っています。この度になって成長を続けるのは、高校時代に本気で通じた経験があるからこそ。守山北高校で過ごす時間が、みなさんにとって人生の宝になることを願っています。

#02 「頑張る」よりも
「楽しむ」高校生活を

オーダースーツ DAVID LAYER | 伴野 友彦さん

30年前に、私は守山北高校を卒業しました。学生時代を振り返ると、大きな挫折を味わった一方で、私のキャリアにつながる「最後で決めなければならぬ」という貴重な経験もしました。みなさんは勉強や部活動、学校の行事や人間関係など、失敗や挫折も含めて様々な経験を積み重ねています。ただ、私は「頑張る」という言葉は好きじゃありません。「頑張る」で少くも、達成感ややりがいを感じたいです。高校生活を「頑張る」というよりも「楽しむ」の方が、何事も前向きに取り組むことができます。謙虚な姿勢で感謝の気持ちを持ち、何事も情熱を持って取り組む。自分自身の成長を「楽しむ」、そんな人生の土台を守山北高校で積み上げられたと誇っています。目の前の日々を大切に、高校生活を「楽しむ」場所が守山北高校であれば嬉しいです。みなさんのご活躍を心から応援しています!

警察官になる夢を叶えた

北村 亮介さん

「私は警察官になるという夢を叶えるために努力を続けてきました。守山北高校での3年間は、勉強だけでなく、部活動や学校行事を通じて、様々な経験を積み重ねました。その中で、仲間と協力して、目標を達成することができました。警察官になるという夢を叶えることができたことは、本当に嬉しかったです。」

山北中学校 山北高等学校
副会長 山北 上菜 | 北村 亮介さん

福祉の仕事で社会に貢献したい

川島 彩音さん

「私は福祉の仕事で社会に貢献したいという夢を叶えるために努力を続けてきました。守山北高校での3年間は、勉強だけでなく、部活動や学校行事を通じて、様々な経験を積み重ねました。その中で、仲間と協力して、目標を達成することができました。福祉の仕事で社会に貢献することができたことは、本当に嬉しかったです。」

山北中学校 山北高等学校
副会長 山北 上菜 | 川島 彩音さん

4-2 目標設定シート

【実施計画書(普通科改革支援事業)別添2】

ふりがな	しがけんりつ ちりやまきた こうとうがっこう
学校名	滋賀県立守山北高等学校

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業） 目標設定シート

本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）							
	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和7年度実績	目標値(年度)
(成果目標)							
「地域における課題に関わりたいと思う生徒の割合」80%以上							単位:
本事業対象生徒:		0	0	60	66%	80(令和9年度)	
本事業対象生徒以外:		45	55	60	65%	70(令和9年度)	
目標設定の考え方: 本校のスクール・ミッションは「地域と協働した学びに取り組み、地域の未来を担う人材の育成する学校」であること、ならびに高校生の社会参画に対する意識の向上は大きな課題であると認識しているから、最終卒業段階における生徒の意識を確認するこの目標設定を行った。							
(成果目標)							
「勉強したことを実際に応用してみたい生徒の割合」85%以上							単位:
本事業対象生徒:		0	0	70	79.30%	85(令和9年度)	
本事業対象生徒以外:		50	60	70	69%	75(令和9年度)	
目標設定の考え方: 文部科学省・厚生労働省「第17回21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)」「平成30年」によれば、「学校の勉強は将来役に立つと思うか」という質問調査に対して、肯定的回答は71%であった。地域をフィールドとした学びや学校設定科目による学びをとおして授業改善を進めること、および学校での学びが生徒の実生活や地域と密接な関係にあるかを測る成果として、高校での学習を卒業後にいかしたい生徒割合を85%と設定した。							
(成果目標)							
「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」60%以上							単位:
本事業対象生徒:		0	0	45	60.70%	60(令和9年度)	
本事業対象生徒以外:		25	35	45	69.60%	50(令和9年度)	
目標設定の考え方: 公益財団法人日本財団「18歳意識調査 第46回国や社会に対する意識」(令和4年度)によると、「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」は34.2%となっており、社会参画に関する意識の向上は課題であり、事業を実施するなかで、生徒同士の会話や家庭における会話として、60%以上を目標と設定した。							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
全校生徒数(人)	519	464	416	390	370
本事業対象生徒数			0	0	34
本事業対象外生徒数			416	390	93(普通科1年)

- ・本事業における成果目標として設定したaからcのいずれの項目においても、自己評価ではあるが設定目標を上回る結果となった。
- ・本事業は今年度で終期を迎えるが、継続的にアンケート調査等を行い検証を継続させていく予定である。